トルコ・シリア地震における国際緊急援助隊での活動

～１次隊臨床検査技師～

◎佐藤 千歳、太田 麻衣子[1)]、南島 友和[2)]、渡部 典子[3)]
医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院[1)]、社会医療法人 雪の聖母会 聖マリア病院[2)]、富岡中央医院[3)]

2023 年 2 月 6 日トルコ共和国でM7.8 の地震が発生し、演者は同年 2 月 12 日に国際緊急援助隊医療チーム 1 次隊区分 1 として羽田空港に集合かつ出国し、2 月 13 日から Gaziantep 県 Oguzeli 市にある Oguzeli 職業訓練校を活動拠点と選定し、活動を開始した。国際緊急援助隊医療チーム臨床検査部門 1 次隊としての活動初期は、約 30 トンの資機材の荷卸しおよび臨床検査室を含む診療および生活サイト設営が主であった。一方で、2 月 15 日から診察が開始されたことに伴い、臨床検査の早期開始が強く求められ、検査テントの展開、機器の動作確認、精度管理等の検査環境の整備を速やかに遂行する必要があった。1 次隊における検査実施件数は、2 月 17 日から２2 月 23 日の期間に、生化学分析 6 件、血球算定 6 件、ヘモグロビン測定 3 件、血液ガス分析 4 件、尿検査 10 件、妊娠反応定性 2 件、心電図 10 件、超音波 27 件、感染症迅速検査 16 件、採血 2 件であった。

1 次隊での課題は以下の 3 点である。1 点目は設営等といった Logistics としての意識が強く求められる。すなわち、臨床検査技師の役割以前の、ワンチームとして他職種と協力してサイトを作りあげるといった能力が必要である。次に、今回のトルコ・シリア地震ミッションは早朝夜間には氷点下となる、国際緊急援助隊医療チームが経験したことのない内容であった。そのような環境下において日本から輸送した検査機器は動作不良を起こすなど大変苦慮する場面に遭遇したが、段ボールやアルミシート、および使い捨てカイロ等を活用して検査機器を稼働させるという工夫など、日本の医療機関ではおよそ想定しない外部環境への柔軟な対応が必要である。3 点目は、国内外における災害医療の進化に対応できる人材育成と確保である。すなわち、今回のミッションにおいても、EMTCC への早期レポート、EMT type2 としての診療、WHO や他国による site visit など、１部門に過ぎない臨床検査でもこれらの対応から逃れられない状況である。このことは単に実派遣の経験だけに頼るのではなく、教育機関での卒前および技師会による卒後の教育として災害医療や災害検査分野に関する制度構築も急務であると演者らは考えている。